

若きビアトリス・ポッター（・ウェッブ）の経済研究 （Miss Beatrice Potter(Webb) 's Study of Economics）

—基本問題・理論・マーシャル・政策と社会科学—

佐藤公俊(Kimitoshi SATOH)

長岡工業高等専門学校 特任教授

(Professor of National Institute of Technology, Nagaoka College)

電子メールアドレス：kimitoshisatoh@gmail.com

報告キーワード：ビアトリス・ポッター・ウェッブ、アルフレッド・マーシャル、ハーバート・スペンサー、社会的病理の診断、古典派政治経済学原理の修正理論、政府介入主義

1、はじめに

本報告は、ビアトリス・ポッター・ウェッブ（1858年生-1943年没）の修業と徒弟の時代末期の1886年～1887年春の経済学的自律と恩師のハーバート・スペンサーからの独立に注目し、彼女の初期の社会学的経済学をスケッチし、その社会経済学としての意義を検討する。とくに、彼女の1886年～1887年春の経済学と理論との研究成果とそこにおける古典派政治経済学原理への批判の理論的意義を考察する。彼女は社会的な貧困問題の解明・解決のため、貧困の原因を「診断」できる経済学を求めて研究し、古典派政治経済学原理を批判し、古典派政治経済学原理を社会的病理の診断ができるように修正した経済理論と、対応策としての政府介入を求めた。二人の「論争」において、スペンサーは、古典派政治経済学原理主義と自由放任哲学から彼女の理論を批判した。ビアトリスの「反批判」は、古典派政治経済学の原理の現実類似性が薄れてきた19世紀末の貧困という社会的「病状」の「診断」と、政府介入の必要性の認識の問題を提起したのである。

2、若きビアトリスの社会活動

少女時代からビアトリスは貧民の窮状と労働者の貧困の問題に心を痛め、その救済や問題の社会的な解明・解決を願ってきた。1880年代ロンドン社交界にデビューした時でも、自身の基本問題として社会の貧困の解決を目指して、ロンドンの貧民街で個人活動として慈善団体のボランティアに従事した。しかし、彼女は社会的貧困の撲滅を願っても、貧者救済の慈善活動をするだけでは、貧困の社会的解決に不十分であると悟り、貧困の原因の解明として、劣悪な環境での低賃金の苦汗労働などに携わる女性労働者の社会調査をおこなった。彼女は都市で働く女性の貧困の原因を苦汗労働がなされるスウェッティングシス

テム（苦汗制度）にあると規定し、スウェッティングシステムをなくすために、その実情を調査し、その専門家として議会の委員会で報告した。

後年のビアトリス・ウェブの貧困問題解決の方策は、シドニー・ウェブと結婚後の Partnership（共同事業）の一環である共著『産業民主制論』（1897年）で示された。Partnership というのも、ビアトリスがシドニーとの共同事業時代を自伝的評伝の第2巻で *Our Partnership*（『私たちの共同事業』）という題で論じているからである（Webb, B. 1948）。『産業民主制論』では、ナショナル・ミニマムを基準とした政府の法律による企業への規制によって、一方では、全ての労働者に最低限の人間らしい労働条件を保障して、労働者の健全性と生産性の向上を促す。他方では、そうした条件を確保できない非効率な企業を寄生的と呼んで政策的に排除して、低効率な低賃金労働、特に苦汗労働を社会的に淘汰・撲滅するという、社会進化による社会改良の方策が示されている。

話を戻して、若き慈善家・社会調査の専門家のビアトリス・ポッターは、社交界の交際で、自由党の若手リーダーのジョゼフ・チェムバレンと知り合い、恋愛感情を持った。しかし、ビアトリスは、貧困対策の議論においては、ガスと水道の都市改革主義者で自由党の若きリーダーのチェムバレンの学識にかなうはずもなく、また彼が家庭の天使として家庭に入ることを望んで求婚したため、勝ち気で女性の自立を志す彼女は彼からの求婚を未練ながらに断った。失恋の痛手のまっただ中で、彼女は、チェムバレンの都市改革策に対抗する理論を探ったと思えるのだが、1886年年初から貧困の原因を「診断」できる理論を求め経済学を研究したのである。

3、基本問題への迂回的接近と成果

こうして惨憺たる思いの中で彼女が1886年1月からとりかかった経済学説研究の成果を検討しよう。彼女は貧困問題の一般的社会的な解明・「診断」(diagnosis) (Webb, B. diaries) のため、貧困を生産する原因となる社会経済状況の分析と対策を「診断」する理論を求めて研究を始めたのである。ビアトリスが直接の「診断」の社会理論でなくて経済学説を研究したのは、ジョゼフ・チェムバレンへの対抗意識があったせいであろうか。研究の成果として彼女は、“The History of English Economics”（「イギリス経済学の歴史」）(Webb, B. 1886) と“The Economic Theory of Karl Marx”（「カール・マルクスの経済理論」）(Webb, B. 1887) を手書き草稿として書きあげた。それらは、彼女にとって残念ながら未刊に終わったが、彼女は前者で「交換価値を有していてそれゆえに貨幣のタームで測定しうる」人間性の部分についての「真の経済科学」を提起した。それは、当時の経済理論の新しい潮流であるマーシャルの“The Present Position of Economics”（「経済学の現状」）(Marshall, A. 1885) を参照した議論であった。

4、背景：1926年のビアトリス・ウェップと1886年のビアトリス・ポッター

1926年出版の *My Apprenticeship* 『私の修行時代』(M.A.) では、1886年から1887年の社会科学の時代について、社会学的経済学の研究と規定し、歴史的方法が獲得されたという。その歴史的方法は、「進化的、発生的、動的、比較的方法」が含まれていると解説されている。しかし、M.A.では、1886年の「イギリス経済学の歴史」と1887年の「マルクスの経済理論」という、当時の2本の草稿を、書き直して1本にまとめて、「経済科学の本性について」：On the Nature of Economic Science, ((1) My Objections to a Self-contained, Separate, Abstract Political Economy and (2) A Theory of Value)と題して付録として収録するというように、後の時代の成熟した観点から振り返って、これらの草稿を解説しているのである。

ビアトリスの1926年の『私の修行時代』の本文の説明によると、若きビアトリスはリカードらの古典派政治経済学の抽象的演繹的方法を批判して、歴史的方法を提起した。この「歴史的」という言葉は、「進化的、発生的、動的、比較的方法」の意味で使用していると注記されている (Webb, B. 1926)。したがって、彼女は「歴史的」方法として実は、「進化的、発生的、動的、比較的方法」で経済学を提起したわけである。ただ、熟年ビアトリスは「これらのエッセイの中に何か本質的な独創性がある、とは私は思わない」と謙遜しているが、実際には、1926年の「経済科学の本性について」論文では、彼女の1886年の社会学的経済学の個人主義的方法と対象領域から、集合主義的で進化的な社会科学的な社会経済学への発展がみられる。筆者はこれらに共通する「本質的な独創性」があると考え次第である。こうしたビアトリスの「本質的な独創性」と「先駆性」を確認するためには、彼女の「イギリス経済学の歴史」における、リカード政治経済学原理批判と原理の批判と修正の問題を考察しなければならない。

1886年当時の草稿と日記から彼女の経済学の発展の詳細を確認でき、また、その検討から1926年のM.A.の解説と異なり、新たな青年ビアトリス像の把握が可能である。筆者は英文タイプ書きに直した彼女の手書き草稿「イギリス経済学の歴史」から、若きビアトリスの経済学体系に関するポイントとして、古典派政治経済学原理批判と新たな経済学と経済学者の任務の提起を挙げたい。それらは、①スミスの改革者としての評価、②ビアトリスのリカード政治経済学原理批判、③ビアトリスがマーシャルに見出した正統派からの救い、④ビアトリスの新しい経済学の観点：経済現象の三層構造、④-1.I 経済学の心理的現象、④-2.II 物質的現象、④-3.III 物質的要素と心理的要素の両方を含む現象、⑤交換価値の測定の「多くの『攪乱の原因』」、および、⑥能力と欲望の退化という社会病理の診断法である。

5、原理から理論へ

ビアトリス・ポッターの経済学体系構想の出発点となった草稿「イギリス経済学の歴史」を検討しよう。そこで、彼女はマーシャルの経済理論の方法として、「経済学の現状」“The

Present Position of Economics ” (Marshall, 1885) を参照し、欲望と能力の結合から新たな経済学体系を構想した。彼女は「真の経済科学」を提起して、経済理論の新構想を提示した。すなわち、ビアトリスは、「イギリス経済学の歴史」のなかで、つながる人間関係を社会的本質・原理とし、その人間関係における欲望と能力が経済的な欲望と能力として現れ、経済的欲望と能力とのつながりを交換価値関係とし、それらの本質・原理の社会的現象を心理的・物質的・心理的／物質的の三層で把握して表現する新たな経済学を提案したのである。

また、ビアトリスは「イギリス経済学の歴史」で、古典派政治経済学原理の批判を提起した。彼女はそうして政府の介入政策を想定する進化主義的社会経済学の方角性を示したのである。

6、マーシャルの参照と無視

ビアトリスのこうした原理による社会学的経済学は、マーシャルの「経済学の現状」における経済学と社会学とコント的な領域区分と前提は同じであり、彼女の対象領域はコント的な社会の人間の本質の活動領域から、社会学的原理の経済関係へ現象する関係であった。しかし、マーシャルの演繹法的オルガノン(理論装置)の方法を参照しつつも、彼女はそれに対してさして注意を払わなかった。マーシャルが経済と外部の関係を区別することで、コントと異なり、市場経済と外部の経済領域を、社会経済の同次元の現象領域でとらえて関係づける社会経済的観点に移行していたためなのであろうか。社会経済的観点があるとはいっても、彼は、オルガノンにより、市場経済を中心に理論化した **Economics** をまず形成してゆくことを、研究戦略として選んでいるのではあるが。

こうして、ビアトリスの社会の把握もコントに基づくものであるが、「イギリス経済学の歴史」では、まだ、マーシャルが新たに提起した **Economics** の領域にも社会経済学的対象領域にも気づいてはいない。後のシドニー・ウェップとの共同研究では、彼女はシドニーとともに、市場経済理論ではマーシャルの **Economics** に依拠するのである。また、帰納主義を好む彼女の当時の推論方法は演繹的ではあっても、オルガノンによる事実の意味付けではなく、人間の本質が個人において社会的現象や経済現象として表現されるものであった。それは社会一般—特殊経済という関係を有する領域における、主体としての人間の本質・原理が市場社会に現象する関係であって、近代社会ではそうした市場経済関係が社会全体を規定するという個人主義的な社会学的経済学の方法といえるものであった。

7、社会経済学的政策論と社会科学の方法

1886 年後半のビアトリスとスペンサーとの「イギリス経済学の歴史」を巡る「論争」はこれまでほとんど注目されてこなかった。この知られざる「論争」を検討して、彼女にとってどのような意義があったか検討しよう。

1886 年 9 月ビアトリスは完成した「イギリス経済学の歴史」のアブストラクトをスペン

サーに送った。その内容に対して、進化的・生物学的社会哲学の師であるスペンサーから、政治経済学の原理を適用する方法の混乱として、激しい批判を受けた。師の批判に対し、ビアトリスは日記に「H.S. (ハーバート・スペンサー) は歴史的感覚がない」と書いて、師に提出こそしなかったが「反論」を強調したのである。

ビアトリスは、この「論争」を通して多様・多層な変化を見せた。彼女は古典派政治経済学原理の信奉者でなくてその理論的修正を必要とする立場を自覚し、さらに社会経済学的政策論へと移行したのである。すなわち、彼女は、スペンサーから進化主義を受け継ぐも、スペンサーの政策論である個人主義的自由放任論に歯反対して、「イギリス経済学の歴史」の社会学的経済学の立場を強調し、人間の本質・原理が現象する社会学的および政治経済学原理の観点から、市場と政府の各領域の現象間の社会経済学的相互関係とそこにおける政策論を強調し、政策による政府の介入や進化制度的方法を強調したのである。それは、ビアトリスが歴史主義として、学問的には社会科学の諸領域間の関係、および、各社会領域間の現象の関係を論ずる社会経済学の観点に移行したことを意味するのである。

こうして、ビアトリスは<スペンサーの歴史的センスのなさ>を批判することで、師の立脚する古典派政治経済学原理と自由放任哲学とから決別し、自身の基本問題にそった介入主義と制度理論を自覚し、社会経済学者として、もう少し後では、集合主義的社会主義者として、師から独立した道を歩むこととなったのである。

8、結語：ビアトリスの経済学的自律と自立

ビアトリス・ポッターは、経済理論の研究では、当時の新進気鋭の経済学者アルフレッド・マーシャルの経済学を援用し社会学的経済学を試み、また、スペンサーが背景とする古典派政治経済学原理を批判して、それに対抗することによって社会経済学的政策論を形成していった。ビアトリスの1886年後半における、社会学的経済学の観点から、社会経済的な各領域間の現象の関係を論ずる社会経済学的な観点への移行を通して、彼女の経済学の自律の起点が生成したといえよう。さらに、シンプルな社会経済学的観点は、彼女の後の集団や生産関係同士の集合的で制度進化的な社会経済学と福祉経済学へと展開していったのである。

こうしてビアトリスは経済理論研究者として自律し、恩師のハーバート・スペンサーから独立ゆくこととなったのである。彼女は、結婚前のビアトリス・ポッター時代に集産主義的社会主義者となったことは広く知られているが、こうした青年時代の経済学研究が彼女の熟年期の制度進化的社会経済学の原点となり、自立した社会経済学者となっていたのである。

我々は社会経済学にもとづいた福祉経済学や福祉国家体制論を構築するため、ビアトリス・ポッターやビアトリス・ウェッブの社会経済学的研究と問題意識を、コントやスペンサーの社会学やマーシャルから現在のジェフリー・ホジソンに至るケンブリッジの社会経済学の伝統に位置づけ、彼女の問題意識の意義を拡張し、展開してゆかなければならない。

以上

引用文献

Webb, B. [1886], “The History of English Economics” , PASSFIELD Collection, 7/1/3,1886

Webb, B. (Potter, B.) [1887] , “The Economic Theory of Karl Marx”, PASSFIELD Collection, 7/1/5

Webb, B. [1926a],*My Apprenticeship*, Longmans, Green and Co., New York,1926.Paperback edition published by the Press Syndicate of the University of Cambridge ,1979

Webb, B. [1948],*Our Partnership*, Longmans, Green and Co., New York,1948

Webb, B., Beatrice Webb's Diaries,

<http://digital.library.lse.ac.uk/collections/webb>,

“Beatrice Webb’s Typescript Diary, 15 February 1886-December 1888”

Marshall, A, “The Present Position of Economics”,1885, in *Collected Essays 1872-1917*, OVERSTONE PRESS,1997 (アルフレッド・マーシャル,『経済学論文集』,岩波ブックサービスセンター,1991年)